

えに、それが単なるスローガンに終わらないよう、具体的な方法が示唆されなければならない。

最後となりましたが、若輩者の私に、貴重な紙面を割愛して載いた貴研究所に感謝しております。

## 仏教と児童福祉

綿野得定

山口教区長  
山口教区長西組西田寺兼務  
山口教区長西組向岸寺住職  
同愛光幼稚園長

### 第一章 序

凡そ釈尊の仏教は、人間救済か、又は人間解脱かの二つを除いて仏教なく、この二目的のため、広汎且詳細な多面仏教の真隨を發揮して来たのである。

その数は、老若男女、貴賤貧富を問わず、その対象とし、範疇として、広く包含されて来たのである。されば児童福祉も、当然大きな使命の下に取扱われた筈であるが、少なくとも、我国に於いては、例外なく、児童福祉を掲げ、その名の下に取組んで、活動して来た事蹟は極めて少なく、又日も

浅い。

我が国に仏教渡来以来、成人、男女、僧俗教化の爲め、飛鳥、天平、藤原と南都仏教に始まる初期仏教から、平安、鎌倉と仏教の最盛を経ながら、仏承の過程にて、時に、之を越えんした事もあったようではあるが、やはり、成人仏教、山岳仏教、貴族仏教としての伝導が中心をなしている。

偶々鎌倉期に入り、法然上人の浄土念仏の立教開宗に始まり、禅、日蓮諸宗の開花を迎え、ようやく、大衆仏教の様相が極めて、色濃く、広く浸透した事は、喜ばしい事である。併し我が国の政情の変遷が相次

いだ為め、その政治、政情の追隨に目を奪われ、大衆仏教の本来の使命を棚にして、本来の目的から離れ、遊離して、政治に追隨するに急であつた時代が長かつた。

従つて、児童福祉が、定着するいとまあらずと考えられるのである。成人救済乃至解脱の中に、児童問題や福祉も含まれるか、もしくは、避けて通つたとか云い様のない安易な時代が続いたのである。真剣に児童福祉を標榜するなど、遠く考えも及ばなかつた様である。

ただ鎌倉期の、法然上人、親鸞上人による他力浄土教の人間救済が、人間的自我の世界を開き、人間生命の価値を著しく高め、人間性を開発する大きな原動力となつて来たのである。法然上人の四天王寺に於ける病人救済又は空也上人の踊り念仏、念仏ひじり達の念仏行脚にも、社会福祉の足跡は大きく印せられたが、児童福祉にまで及んだ様子は、極めて薄い。

北条、足利、戦国時代にも、あまり見るべきものはなく、時代は、不安定時代からやがて、封建政治態勢ながら、江戸時代に入る。安定政権が確立せられ、浄土教を始

めとする仏教保護政策が取られ、江戸を中心として全国各藩も之に習い、人材養成策が重用された。中でも藩校や、寺小屋教育が盛んとなり仏教者の中にも、漸次、宗教活動が活潑となり、東西に児童福祉として取上げるに価する活動家が出始めた事は、注目に値すべき事と思われる。

与えられた論題に取組むことの出来るのも江戸中期の辺りを起点としたい。特にこの中で、解脱自力教の禅家から、越後の良寛上人出で、西に他力救済の浄家から、長門大日比の法岸上人を生み、共に我国の児童福祉教化史の第一頁を飾った事は、徳川安定政権が始って間もなく、その胎動があったのであり、その芽が中期に、この二師を頂点として開花した事を特筆大書したい。同時に、寺小屋教育が制度として社会に定着した所産でもあらう。

江戸のお膝元をはじめ諸藩こぞって、人づくりの必要を感じ、藩校、寺小屋教育に力をそそいだ趨勢に着目したのが、ここに挙げる法岸、良寛の両師である。両師の活動は、決して派手ではないが、それぞれの地域に、歓迎され、干地に水の浸みこむ様

に、ひたむきな人間の交流がつづけられたのである。児童福祉の草分けとして、根を降ろしたのである。

法岸上人 延享元年五月四日 44 ~ 1815 71才

文化三年三月五日 17 ~ 1815 71才

良寛上人 宝暦五年 天保二年一月六日 1756 ~ 1831 75才

法岸上人は、良寛上人に先立つこと、十二年、両師共に、こどもとのかかわりを持ち始めた年代も、ほぼ同時代と云へる。一応本稿では、良寛上人を置き、筆者が三師の晋董せし大日比西円寺にて得度をうけ、三師の末裔として、今日あるを思い、五十余年その風に浴し、兼務注職十二ヶ年を経しことは、正に三師の教化の跡こそ、児童福祉の先鞭としてペンを取ることの適任者たるを思い、不敏、非才、浅学を顧みず、囑に応じたのである。

## 第二章 三師垂誡の源流

大日比は、山口県の観光で知られる青海島にある。青海島は周囲三十軒で、北半分は、断崖、絶壁がつづく日本海を背に、内海に、四つの村、人口凡そ四千人が居住し

ている。島の東端に通村あり（現在長門市通区）。四百年の歴史を持つ向岸寺あり。

元禅宗であるが浄土に改宗して、四百年た

つ。この寺の第五世に心蓮社讃上人あり

当時元禄年間、北極洋の鯨が、餌場の海

の結水のため、餌を求め、子鯨を養い、鯨

群の移動の激しい頃で、捕鯨も亦本格的に

なった時である。太平洋、日本海両方に別

れた鯨群が、日本列島をはさんで、降って

来る。通村を始めとして、仙崎湾周辺は、

秋から翌年春にかけて廻遊する鯨に着目し

捕鯨により勇を鼓舞し、水揚げによる財源は、

村を潤し、時に藩財政をもうるおしたので

ある。衣食足りて礼節を知るの例え通り、

潤いのある生活の中に、ふと反省の念と共に、

毎日の様に、浜に引上げられる鯨を見、

切り裂かれる度に、流れる血汐があたり

一面の海を真赤に染める様子を見て、憐れ

を催おした事も多かったのである。偶々讃

上人は、向岸寺を引退して、清月庵と呼

ぶ観音堂を建立して閑居念仏していたので

ある。上人は、池永姓を名乗る網元出身だ

った為、鯨に対しては、人一倍関心も深か

った様である。当時の同家は、捕鯨の網元

として、最も栄えた家であった。深い称名念仏の心は、いつしか、切り裂かれる鯨を見、時に腹中から取り出される胎児を憶うと、たまらずに鯨墓建立や、くじら供養を思い立ち、生家を含めた三人の網元に協力を求め、堂前に墓地をつくり、胎児は、それ以来、悉くこの墓に埋葬し、本寺住職松誉と共に、人間同様の戒名を過去帳に誌したのである。

元禄五年五月、師 六十四才

1692

二米余の堂々たる鯨墓の表には上部に南無阿弥陀仏と刻み、その下方に業尽きし有情（胎児）放つと雖も生ぜず故に人天に宿して、同じく仏果を証せんと誌されている。本寺向岸寺には、同じ元禄五年調製の七十糧余の位牌と、五百余頭の戒名をつけた過去帳が現存する。

鯨墓、昭和九年、文部省史蹟に指定

位牌、過去帳は 昭和五十年、山口県

文化財に指定

くじら供養、魚鱗一切の得脱回向の法要も、それ以来、つづけられて今日に至っている。動物や、鯨魚、水子、胎児にまで、念仏回向を手向け、深い憐愍の情をさしのべたの

である。

讃誉上人はその後二年たった元禄七年（二六九四）、建立工事のすんでいた、西円寺の開山上人となったのである。以来八代目、八十五年後法岸上人が西円寺住職として迎えられたのである。西円寺開山讃誉上人は、晩年清月庵にかえり、享保十九年十一月百六才にて遷化する。それは法岸上人入山前四十三年であるので開山の事蹟や、くじら供養を目のあたりにし幼い一ケの命たりとも大切にする風は、法岸上人の心を打った事であろう。

師は亦、江戸時代本宗最高の名師と云われる関通上人晩年の愛弟子であった。通師（関通上人）の広宣流布をされた専修一向の称名を、西円寺の定式となし、これを以って、檀信徒の教化をはじめ、胎教として妊婦に日課を授け、児童福祉の先駆である日曜学校（こども念仏）を始めて児童教化に専念したのである。

道俗男女、貴賤貧富を撰ばず、常に対機説法と一視同仁の深慮から、如来本願の妙法を説き続けたのである。

当時の知恩院門跡華頂宮一品法親王が、

法岸上人の影像に賛して曰く。

温かたる遺容の中に、其徳を見る。卓れたる彼の言行は、我門の程式なり。と師のおだやかな姿、微笑の絶えぬ顔に接することも達は、自然と寺に集まり、師のあとを追う日も多くなり、児童福祉は、美しい形の成果を挙げて来たのである。

唯現今の社会福祉は、ともすれば欠陥として感じられる面に、最低生活を保証すると云う法に依り、その線までは保証、救済に意を用い乍ら、与える側に謙虚さが少なく、冷淡さえ感じられる。

この点につき仏教福祉は、十分その点を考慮に入れ、慈悲無際限の深志を生かし、仏同坐のすばらしい理想郷に遠く視点を合わせて行くべきである。現代の欠陥の一つに、物を与えれば、それで終る式の浅薄な思想を払拭して、臨むべきであろう。

先述の鯨墓碑文に見える「人天に宿して同じく仏果を証せしめん」の句は、正にこの辺りの消息を語るにふさわしいと思う。

即ち、魚や鯨たりとも、その命はかけ替えのないもの、その生命を提供して呉れた鯨魚の命こそ、我生命なりと回向するとき、

魚と人間とが正に、同列に置かれて、対座しておるのである。そこには富者の傲りもなければ、強者の慢心も見られない。このすばらしい師と子ども達の出合いにより、子ども念仏が軌道に乗り、世界最古の日曜学校として発足したのである。

法岸師により始められた子ども念仏が、俊足の弟子、法洲上人（洲師）へ、更に法道上人へと受け継がれて、今日に至っているのである。

一器の水を一器に移すが如く、専修一向の念仏が伝えられ、称名念仏が、道俗生活の基盤となる為に、念仏のひたむきな実践修行と、大日比三師の深い心が、之を支えて来たと考えられる。

先述した西円寺に現存する三師の御垂誡が、これを支えて来たのである。この三師の訓示を、毎年の年中行事の中で、特に盆法会（十四、五、六日）の昼夜三日間の説法の中心課題とし、寺訓とされて来たのである。中年以上の老人達は、文章の半ばを暗誦しておる者もある。

この垂示こそ、初代法岸上人が入山以来称名念仏を専修一向として、如何に、道俗

の日常生活の根底にマツチさせるか、又いかに恩師関通上人の師命を生かすかに、志向を集中させ、遂に巷間、日本一くらべの本の中に、日本で只一ヶ寺、お経を読まぬ寺、と紹介される程に専修念仏の法式を定められたのである。

### 第三章 三師垂誡の由来

#### (1) 法岸上人の垂誡

法岸上人（56才）は、寛政十二年（1800）大日比西円寺にありしとき、弟子法洲上人（35才）が近畿泉南の地にて、教化、布教に専念していたのである。偶々近畿京都の大徳、遊誓仏定上人が、その住職寺、京都府豊岡の来迎寺から、師籍に転住され、来迎寺の後住適任者を求めておった。同寺は、殿様の菩提寺の為速かに後住決定を迫られていた。仏定上人は、法洲師の学徳兼備を知り、師に来迎寺後住の白矢を向けられた。法洲師は、長門の恩師、法岸上人に許可を得るいとまなく、遂に承諾したのである。

住職入山の理由を具して、長州の法岸上人に師命あらん事を、求めるや、法洲の将来を慮り、指針を一緘の書に認め、使を立

てて、送った一文が、本書なり。簡潔の文書の中に出家の一大事をのべ、本願大悲の他力を喜ぶべき宗門人が、自力、慢心を増長して、往生をし損することなき様、若さと俊秀を誇る法洲師に頂門の一針としたのである。

子ども達も又、法岸上人の慈眼の中に、深い愛情が、この様にそがれていたのである。

#### 御垂誡

我人常に心に係て用心すべきは、憍慢高举の心にて候、遺教経に云、憍慢を増長することは、世俗白衣の宜しき所にあらず、いかに況や出家人道の人に於てをや等、又元祖大師曰、憍慢の心発りぬれば、弥陀も諸仏も護念し給はずなりぬれば、悪魔の為に悩さるるなり、恐るべし慎しむべし等と云々。是等の仏祖の遺誡を警策として、能々慎むべき事に候、よきに就ては、我よしの心出るが凡夫の常の習ひなり、其よしとおもふが、とりも直さず悪心なるをや、又悪きに就ては、其際限をしらず、兎にも角にも取どころなきが、我等が身や心の有さまなれば、只「浅ましとわぶるばかりを手向

にて、となふる外の心あらじな」

嗚呼助け給へ南無阿弥陀仏。(已上老師法岸上人ノ御垂誠)

## (2) 法洲上人の垂誠

法洲上人(66才)は、天保二年十月五日、既に斜<sup>カサ</sup>古溪<sup>コケ</sup>の隱室に入り、弟子、法洲上人(24才)に、西円寺住職を譲っていた。若くして、法灯を継いだ法洲上人が、隱室へ、師、法洲上人を訪れ、住持訓を乞う。師は、その願を容れ、自身、若き折、故法岸上人から、使を立て、住持訓たる垂誠を受けし一文を、取り出し、之に解説を附して、与えしものなり。

當時、我が宗門界にて、学徳兼備と讃えられたる師が、愛弟子法洲上人から乞われるや、すばらしく明快な、煩惱の解説をなし、特に慢過を慎しむ様に、指南した垂誠なり。慢心は結局、自恃輕他なりと喝破して、淨土他力門と相容れざる旨を示して、往生の一大事を示したもののなり。

大目比のこども念仏による教化の実践も、謙虚と他力の信心を如何に、浸透せしめるか、受取らしめるかに努力を注いだのである。

る。

「愚老謹で御垂誠の義趣を熟思し奉るに、一往再往の二義あるべし、一往の義とは、謂く十使は共に通仏法の惑障の根本なりといへども、是を割判するときは五利使は破石にたとえられて、易断の頼みあり、五鈍使は藕糸に譬せられて、難断の煩惱なれば、しばらく易断の五利を閑きて、難断五鈍の慢過を挙て、これを抑制し給えるか、されども是は一往の淺義、恐らくは御垂誠の本意にはあらざるべし、次に再往の義とは、謂く難断煩惱の中にて、貧瞋癡疑の四鈍を閑きて、殊に慢過を挙げ給えるは、夫慢には七九十二等の合離分別の多種ありといへども、畢竟自恃輕他の心を出されば、別して我淨土門に大害をなす事、自余の及ぶ所にあらず、其故に慢は既に自恃輕他の心なり、争か信機信法を安心の極地とし、三仏大悲の教意願に随順するを、極則とする宗義に相応せんや、其違逆する事水火黑白も猶比類にあらず、これによりて往生成仏の大利益をうしなはしむ、さるから導師の悲懷、はじめに経釈の明文を掲げ、次に生涯受用の溫奥を尽し、懇々垂誠し給へるか、是再

往の深義にして、御垂誠の本意ここに在べし。嗚呼尊とひ哉導師の垂誠、愚老をして、邪路に陷人せしめず、順次に楽邦に往詣せしめ給ふこと、全く導師の賜なり。既に導師は慈念深重にして、不請の愚老にすら此恩賜ありし、然るに汝は敬慎にして懇請をなす、愚老も亦木石にあらず、如何ぞこれを耳外にせん、故に生涯又なく信受せし、導師御垂誠の一条を拝写して汝に与ふ、愚老今年世寿六十七歳、識力ともにおとろへて横筆も杵をあぐるが如し、謝世既に旦暮に逼れば、これをもて又遺囑の語とす。語も語にあらず、文も文にあらざるをもて、等閑の看をなさず、導師御垂誠の妙所に悟入して、自利々他せよ、さらば遽からず愚老と汝と共に、導師の誘引に随ひ、楽邦の中台に入り弥陀慈父に随侍し、百法妙門六通自在、自他兼濟の大利益を得んこと、掌を指が如し、豈快にあらずや、至嘱々々。

天保二年十月末の五日、吉水正流の遠裔託阿弥陀仏法洲、老眼を拭ひてこれをしるし、弟子西円寺現住権上人法道に授与し畢。(已上先師法洲上人の御垂誠)」

(3) 法道上人の垂誠

恩師、法洲上人から授与された住持訓は、故、老師法岸上人原作、法洲上人の解説と二恩師に依るものである。この二恩師の本意は、法道独りで捧持するのではなくて、弟子、同行へもこの深旨を伝えるべきなり。自持堅他の心を戒めんと、特に毎年の盆会に、この文を講ずることを、西円寺永世の定めとする。二恩師の垂誠文を中心にして更に村中の生活に即した年中行事を定め、寺檀一体の、もと現当二世安樂のために強く、念仏称名のすすめを行った。

「夫正月元三は年月日の元にて、一年の因等起に當る万の事始なればこそ、一年の籌は正月にありといへり、さて心を正すべき月なれば、一月とはいはずして正月といひ心神を改むるの義より、改神の年ともいへり、されば誰々も心を正して万事を慎み、旧き弊を改むべき事なり。先第一親に孝行を尽すべし、夫孝は百行の本なれば、衆妙の門といふ、故に三道一致にこれを教ゆ、仏教には孝名為戒の金言あり、神教には父母を内外両宮と仰がせ、儒教には忠臣を孝子の門にもとむといへり、鳩に三枝の礼、

鳥に反哺の孝とて、禽鳥すらかく孝をなせり、今人として不孝なるは、彼鳥類にも劣りて、所謂人面獸心なるべし、後世は報土に往生するもの、今世に於て人面獸心の汚名を蒙りて可ならんや、よくよく思惟すべし。又身の程をしること至て肝要なり、されば吾身の分際を能く知り、衣食住をはじめ、一切の交際に至るまで、牛は牛連れ、馬は馬ずれがよきなり、万事につきて儉素を守り、かならず上見て交際せず、随分下を見倣ふべきなり、「上みればたらはぬ事の多かりし、かきさてしのべおのが身のほど」、又身持心持は常に正しく、日月のすなほにめぐるが如く、昼夜ところに懈怠なく、それぞれ家業を出精すべし、又貧欲の凡夫の常色とは申ながら、強欲なる事をよくよく慎むべし、林際に鹿を逐う獵師は山を見ず、市中に金を攫む僞兒は人を知らず、狐は鼠を貪りて竹筭に死し、狸々は酒の爲に命をうしなむ、今強欲に耽りて、屬厭となき人を見るに彼狐や狸々にも過たり、又蠅は膠黏に死し、蚊は灯盞に投ずるが如く、強欲の爲に家を失ひ身を亡す者、世間勝て計べからず、強欲をはたらき金銀を積

で子孫に遺すは、慈悲に似たる無慈悲なり、子は其金ゆえに驕奢に長じ、終に其家を滅するに至り、親は強欲の造罪に墮獄して、永劫苦報を免れざるにいたらん、豈淺ましき限にあらずや、故に司馬溫公の曰、積金遺子孫子孫未必守之乃至不如積陰德於冥々之中以為子孫長久之計己上これ実に後人の龜鑑なれば、唯々も此語を肝に鑢め、なるだけ強欲の所業を慎みて、陰徳をこそ積たき事なれ、又正月には福引宝引など号けて、博奕の手習する者あり、凡て博奕の類は、天下一統の禁制なり、されば博奕に類せる事をなすは、全く政令に背ける罪人なり、かかる悪しき遊びを禁ぜざれば、終に大戾たる心を長じ、穿窬などをなさんもはがりかたげれば、能々これを慎むべし。又囲碁象棋小語或は三絃淨瑠璃流行歌曲等、総じて遊芸と号くるものは、其技をもて生業とせる者は、制外なれども、道を守り家業を勤むる者の学ぶべき事にあらず、皆目を損じ他を損ずる、遊治郎の業なれば、ゆめゆめ之を学ぶことなかれ。又浮世二偏の人は生まれ右まれ、出離生死を願ふ念仏の行者は、一際吾身を省て、身の行

い心の居やう、総て倫理礼節にかなふやうにすべし、畢竟は無情をわすれぬを第一として、念死念仏すべし朝暮身の起臥には、必ず十念を唱へよ、「阿弥陀仏と十声となへてまどろまむ、ながきねむりに入りもこそすれ」又「このねぬる朝はまづおおもふべし、夜のほどにも死なでありしと」、又「あけぬらん加茂の川原に千鳥鳴、けふも空しく暮むとすらん」又先師上人は「いぬるとき御名よぶふのはやすけれど、覺るただちに継はかたけれ」、又「夢さむるかねの響にうちそへて、十たびの御名をととなへつるかな」等、よくよく玩味すべし。又御忌会彼岸十夜等、其他祖師祖先の忌日には、必ず逮夜より在家の信者は酒肉五辛を禁じ、唯念仏して懇に回向すべし、其時にあたりて婚姻元服、すべての賀筵等、必ず必ず用ふる事なく、精進を尽すべし、故に古徳は、精進せざれば柱の根を斬が如しと誡め給へり、夫上は仏天の罰を被り、下は先祖諸靈の怨を受け、其家の断絶することを謂へるなり、又当村中新亡あらば、老幼まで残らず打集ひて、長き線香五煙の定めなれば、高笑雑談を堅く慎しめ、念仏回向叮嚀に勤

むべし、総て命終の時より中陰の間は、最大切に追善を営むべき等其制に背くべからず。又総じて専修念仏の行者、別して当村中の者、男女を他へ結親せんに、先専修の家を撰ぶべし、必ず貧福に拘泥することなかれ、宗旨に依て往生の得不定むるにはあらざんめれど、諺にいふ朱に交はれば赤くなる、墨に混すれば黒くなるの理にて、終には邪説に誑惑せられて、邪見に陷溺するもの世間に多し、正見なれば往益を得、邪見なれば必ず墮獄す。これ祖々の論釈、青天白日の如し、故に自身は報土の樂報を極め、子孫を火坑に陥むこと、豈無慈悲の極と謂ざるべけんや、父母たらん者予て心得おくべき事なり。又正しく帰ける期に臨まば、祖先の墳墓、檀那寺の本尊及び祖師前等三拜し畢り、寺主より十念を拝授すべし。又妊娠五箇月にいたらば胎児の為に日課十称を代受せよ、生後必ず利益あらん、又産後百日にいたらば、又日課十称を加倍し、児三歳までは母これを代修し、四歳にならば課号を授与し、児の進みて唱ふるやうに勧めこしらへて、必ず児を自修せしむべし。又月足らずの児を産せし時、寺へもしらせ

ず埋葬する者あり、こは甚だ不実こそ、上にもいふごとく、家滅亡の基なれば慎むべし。又鬼門金神方位方角地相家相の吉凶禍福等、世人のやかましういふて、狼狽さわぐ事なれども、専修念仏の行者は、毫もその崇りある事なし、其理を能々信知して、ゆめゆめ陰陽家者流の言に惑さることなかれ、其鬼門金神等の事を略して示さん、夫鬼門の事諸説紛々たれども、其源天竺にあることなり、天竺の良（うしとら）にあたり崑崙山あり、其石窟に赤青等の鬼住て出入す、これを鬼門といふ、其鬼はもと餓鬼の種類にして、卑き者なり、金神もまた卑き神なり、其故は先この世界を主宰し給へるは、梵天王なり、梵天王の命を、帝釈天に下し、帝釈天これを四天王に命じ、四天王これを五行の神に命ぜらる、されば金神は五行の一たる金を司どり、金氣殺伐の權を執りて、悪人を罰し給へる最あららしき神なり、しかるに願主阿弥陀如来は、三千界の至尊なれば、其梵天王より尊きことはいふも更なり其本願名号は即万善の妙体なり、かく万善の妙体本願の名号を、口々に唱ふる行者なれば、至尊の勅命を信受する、即ち法

王子なりといへり、かかる善行を修する法王子へ、金神いかで罰を加ふることを得んや、況や金神等の尊重する、梵天帝釈四天王諸天善神圍繞して、念仏の行者を護念し給ふを、鬼門金神の殺等、上司の命を犯して、善行を修する法王子へ、崇をなす現あらんや、此理をよくよく信受すべし、滔々たる不安心の者に倣ふて、いらぬ鬼門金神の殺と狼狽、摂取の光明中を飛出ることなかれ、又五月早乙女中は、かならず念仏を申々植付すべし、念々不捨の意案を忘るることなかれ、且つ日輪照育の、余光により、漸々早苗も生長し、終に実のりて米となるなり、殊に日輪は阿弥陀の垂跡なれば、不求自得の利益ならん、かの智明房の念仏をもて田歌とせられし、賢き余風を学ぶべし、又当村は田圃少き海浜なれば、殺生を家業とせざることを得されども、意案起惡正見、意案起惡邪見といふ事あり、かく殺生を生業とするは、固より意案は惡なれども、かかる惡業をなす事よと詫るは正見なり、生業なればと許する邪見なり、此正の際よくよく弁知せざれば、往生の得不到關係する一大事なり、彼「罪きゆる誓の船に乗ると

して、かつにのりたる火の車かな」といへる、本願ばかりとなることなかれ、恐るべし慎むべし、又已ことを得ずして為す殺生なれば、なるだけ殘忍なる殺生は禁すべき事なり、彼大敷網、撒網、夜漁の類（夜分魚の寝たるを擲て取を、方言にこれを夜ぶれといふ）、又は鳥銃獵等は、皆すまじき殘忍なる殺生なり、世教にすら殘忍の殺生を誡めて釣而不網、戈不射宿といへり、況や出世無上の大教を信受せる念仏の行者に於てをや、譬ば今罪もなきに、当村の四面を圍繞し、一人も逃るる所なく、攻殺する人あるか又は屋の稼に疲勞て、よく寝入たるをうかがひ、夜に乗じて吾を刺殺す者あらば、誰々もわが心に於て、彼等を怨み瓜所ざる者あらんや、世の諺にいふ、我身をつめて、人の痛きをするといふ、近き譬をとりて、ゆめゆめ殘忍なる殺生を為すことなかれ。又当村中の者は、皆家業に暇なき者なれば閑時日を俟て念仏せんとおもわば、生涯念仏する期はなきなり、故に老師これを洞察し給ひ、日々暮の六ツ時より五ツ時まで、初夜念仏といふを創おかれしなり、僅に一時の（旧の一時を云ふ）間なれ

ば、相互に誘引して參詣し、日々の課仏を修すべし。

かくの如く數々嚴誡せば、さぞかしうたてく思ふらんかし、されども先師の御臨末に予が手を執て遺囑し給へる一大事、各々が往生の得不到關係するけぢめにして、且つ予も亦先師へ誓言にまで及びし事なれば、豈嚴誡せではあらざるべきや。（已上尊師法道上人の御垂誡）

#### 第四章 寺檀一体の一向專修

法岸上人は、三十五才にして西円寺に晉重するや、幾許もなく、四十八日の別行を修し、日々、村人たちの集いに、いそしみ、本堂には、往生要集の地獄圖と、当麻の蔓茶羅とを掲げ、本信本願、兼信因果のことわりを、説きつづけたのである。わずかに三十余戸の寒村にも、一条の希望の火が点ぜられた様な有様で、村中の老若男女、残らず日課念仏を誓受し、田うつにも、菜つみ、水くみ、網ひき、綱糸をたるるにも、念仏しない者は、なかったと伝えている。

筆者の少年時代にも幾多の念仏の妙好人あり。その中に念仏申しの一老婆あり、彼



女の背には、年中、孫達を負って子守りをしていた。彼の老婆にいつも背中に負うての子守りは、気の毒ぢやねと問いかけると、かの老婆、「小僧さん、うち（我家）の嫁女は、親切者で、重くなったら時々輕いのと、代えて呉れるのでう。南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏」と素直に受け止めて呉れたのが、極めて印象的だった。

大人の集いも、子供の集いも、法式は一切念仏で、寺檀、法会の運びもなく、（法要、法事、葬式、悉く変化なし）、法式一本化の思い切った専修一向の簡素化を、実現したのである。

その為めには、宗義の宣揚と徹底の為め従来の説法に加えて、当時お講釈と云われる程の講義の徹底が必要でもあった。

西円寺入山以来ただ専修の称名念仏を生涯教育として、取りあげて実践したのであるその中に仏教福祉の理念の根本である物に心を添える、換言すれば物の価値観を生ずるのは、実に心の転換による事を祖師の名言「自然悟道の密意」として、会得せしめたのである。

法岸上人の目には、老若男女の別などは

さらさらなかった。ただ師の胸中は、本願弘誓の大悲を徹底し、恩師関通上人から点ぜられた法の燃える火を、伝へるだけで一杯であった。

我が国の憲法に保証される福祉の最低基準の及ばず物中心の考え方が、（施策として止むを得ざるも）、法を扱う人により、ともすれば温かい心を添える事が置き忘れられようとしておるのは甚だ残念である。師はその物すら与える事の出来ぬ当時、寒村とは云へ、農漁両面の幸に恵まれる村人たちに、与えられている現状の、価値を再発見させ、限りなき衆縁による和会ができ

ている事を悟らせ得るものとして、只念仏称名の一行あるのだと、教えられた。かく領解した法師の前には、明るい希望と、ひたむきな実践のみがあったのである。

その為めには、善導大師の指南、一心専念弥陀名号が大きく、深く師の心を揺がし、宗祖法然上人の「人をして欣慕せしむるの法門はしばらく浅近に似たりと雖も」の文が、脳中にあふれ、限りなき大勇猛心と働いて、卓越した法式となり、称名となったのである。

## 第五章 日本で唯一つ、お経を読まぬ寺

華頂宮一品親王下賜の専念仏場の額が、（西円寺本堂正面に掲げてあるが）、よく三師の化風を伝え、大日比を知るに最もふさわしい言葉として、代表される。

毎日三時の勤行すべて、

懺悔・發願文・撰益文・念仏

・回向・

以上の様式に統一して、如何なる法要、法務にも、この通り実践奉修したのである。恐らく関通上人御指南の法説を、仏種を思いきって、最も単純、素朴にして、且祖意そのままの様式で、檀信徒に、老少男女に、浸透せしめたのである。

そこには、三師三代八十年間のたえざる宗義の宣揚、講釈と、平易な勤行による魅力と、その裏に大悲本願の欣びを与えられ、やまずの大勇猛心ありし為と思われる。誰でも憶えやすく、唱え易いおつとめを掲げ、生涯教育の実践場として、俗に大日比流とも云われる程の単純さが、根を降ろしたのである。

法岸師は又、胎教、ことも念仏、日課授  
与男女弟子の得度、育成等にも、意を用い、  
師の生涯中に、師の教化にあずかる士女、  
得度して弟子となるもの一百六人、日課誓  
受凡そ二万人、往生するもの、その数を  
知らず。(大日比三師伝)と。

胎教に於いては、折角人間としての生命  
を得たる胎児が、母胎の中で期間中、心  
身共に最良の条件下に生れる様、特に妊婦  
の心得を、淳々として説いたのである。故  
に大日比では、胎児の日課代受を妊婦に説  
き妊娠中の生活態度を正させ、胎児を一人  
の人格として扱った事に、意義を見出した  
い。

先例として、開山讃誉上人が、隣村向岸  
寺に建立した鯨墓を思えば、師の着想、正  
に慈限視衆生として、受取る事ができる。

仏教の児童福祉は、この辺に真骨頂を見  
ることが出来るのではないだろうか。江戸  
時代全体の政治、文化、経済等、封建体制  
下にては、こども達の置かれる位置は、極  
めて弱く、施策として、又恩恵として福祉  
の手の及ぶことなど、到底考えられなかつ  
たのでは、ないだろうか。胎教については

別項に詳述する。

この様な日本全体の時代背景を、念頭に  
おき、考証に入れて見るとき、法岸上人は  
じめ三師によって継承され、開花されたこ  
どもたちの、集いは、教えを慕う子等が、  
平易な勤行、お経なしの寺にひかれた。又  
人間法岸からにじみ出る童話や法話、恐い  
もの地獄八相にひかれる児童心理などに  
より、極めてスムーズに発展し、根を下ろし  
たようである。

こども達に、限らない興味と期待を抱か  
せながら、次の日までは、狭い村での墨染  
の黒衣の僧と、顔馴染みのこども達との人  
間交流が続けられ、スキンシップの効果が  
めきめきと出て来たのである。

日課授与の中にも、青少年期の子女の多  
いのは、今日なお、その伝統を残している  
例えば、西円寺に於ける五重受者中に、青  
少年子女が非常に多いことである。伝法の  
日などまるで、成人式か、集団見合かと、  
見紛うほど、若々しい。男女共、殆んど結  
婚以前に、五重入行が済んでいる。こども  
念仏で勉強したこども達は十二分に、念仏  
称名の行儀が、身につけている。

称名の声で、子守り教育をうけ、念仏の  
相続による潜在意識への教化は、表面意識  
での行と共に、人間教育のよき総りとなっ  
て行ったのである。

正にお経を読まぬ寺、小細工せずに、人  
間生来の素地の上に、専修の祖意を浸透さ  
せる効果は、すばらしいものだった。

## 第六章 念仏教化の実践

江戸時代に於ける封建体制下の、我が国  
の農漁村の住民は、物心両面の生活に見て  
も、物の生活は、藩閥政治の特色として、  
階級制やかましく、生かさず、殺さずの最  
低の乏しい生活を余儀なくされていたので  
ある。

仍って、明治以来、西欧米先進国の文化  
に瞠目し、国是と施策を、百八十度転換せ  
しめられたのである。一世紀にわたり営々  
として築いた今日の西洋文化の成果と、高  
度成長下の世界先進国の一つとしての充実  
した我が国福祉国家の現状からは、当時の  
農漁村の住民の貧しさなど凡そ伺うべきも  
のなく筆絶の及ぶところではなかった。

然しながら、心の転換法を、称名念仏に

より可能ならしめれば、乏しい乍ら、そこに無上の価値観を見出すことができたのである。念仏の信仰、信心の徹底が、やがて、児童福祉の種まきをなし、三師の願いが、大きく輪をひろげ、教化の歩みを大きく前進せしめたのである。

社会福祉の施策も、公的施設も皆無の当時の村落に、寺の存在と、ユニークな施策とは、こども達には、無上の魅力となり、争って寺に集ったのである。

寺を開放して、こども達をあつめ、その仏性開発をめざす法岸師の不撓の情熱と、ふかい信心は、こども達により、素直に受け入れられ、僧とこども等が大声で呼び合い、境内を走りまわる姿は、思っても、ほぼえましい限りである。

華頂宮法親王は、法岸上人画賛の文に「温如たる遺容は、爰にその徳を見る。卓れたる彼の言行は、我が門の程式なりと。」(大日比三師伝)。

法岸師の真影からも、その人柄が偲ばれる。そのやさしいまなざしに触れ、教化に浴したこども達は、師の童話に大きくうなづき童べ歌に唱和し、あそびに興じ、おや

つに舌鼓を打った事と思われる。

筆者は、西円寺にて得度以来、五十余年をふりかえり、入門して幾許もなく、町の菓子屋より、毎月のこども念仏用のおやつのでんべり入りを、持帰ったものである。その菓子屋こそ、江戸時代から続く、古いのれんの店であった。

### 1、こども念仏(念仏学校)

数年前、NHKこどもの時間に、三十分間大日比の「念仏学校」と云うテーマで、全国放送があった。この念仏学校こそ、法岸上人が三十五才、はじめて青海島の寒村山越えの峠を経て、五十戸たらずの大日比西円寺八代住職として入山の日の抱負であった。

境内に網を干し、こどもたちの表情から、何一つ教養さえ受取れず、感ぜられない寒村に着き、荒れ寺に身を置いた青年僧が、荒々しい漁村のこども特有の言動に接したとき、法岸師の胸には、人間生活を最も長く享受することも達がその生命の価値観を知らず、徒らに馬蹄を重ねる徒勞を思い、不撓の大悲、勇猛心が勃然として、たぎっ

たに違いない。その第一印象を大切にし、生涯こどもを大切にした師の純粹性は、不変であった。筆者も、第二次大戦後、南方戦線から、復員して、帰山入寺のとき、敗戦のショックにより、精神的より所を失い、希望のない言動にたじろいだ日子の子供たちの事が、忘れられなかった。敗戦から、這い出る為の第一の緊要事は、将来の国を背負わねばならぬこどもの教化を置いて他になしと強く感じ、三師伝統のこども念仏をはじめ、児童問題に取り組んだ若き日の事が思い出される。

法岸師の教化の手は、こうして、こども達の上へ向けられ、仏教福祉の心を母体として現代児童福祉の歩みとなり、かくてこどもの福祉運動が発展、定着して行ったのである。

### 2 世界最初の日曜学校

昭和三十六年、イギリスのロンドン大学チャールズ、ダン先生が、世界の日曜学校史研究の為、訪日し、総本山知恩院を訪れた。

その対象が、浄土宗の僧、法岸上人であ

ると告げられ、本山では、直ちに西円寺へ連絡通知を受けた。数日、本山で研究後、西円寺へ来寺と聞いたので、法兄とその打合わせをする。会話不能な為、英文文を思いたち、数枚の原稿用紙に、説明文をつくる。自作英文文を読みながら会話をすめると云う手段である。

いよいよ当日、来寺するや、本堂前で明瞭な日本語で「今日は」と挨拶をうけて驚かされる。するとダン先生は、「法岸研究の為、訪日するのは日本語が必要だ」と、三年前から日英会話を習って来たといわれ、安堵と敬服を憶えた。

その時、先生は、ロンドン大学の図書館には、世界最初の日曜学校を始めたのは、日本の法岸である」と、証明して貰ったのである。

凡そ二百年前、日本人法岸上人によりて世界の日校史の頁が書始められたわけである。英国の教授によりて、世界最初と教えられる大悲の無倦、と卓見による菩薩行を欣び、改めて感銘を深くしたのである。

### 3、胎教

前述したるも、更に胎教についていささかのべて置く。村内檀信徒の中に、妊娠するものあるときには、五ヶ月となり、帯をしめる日の前後、必ず妊婦は、単独もしくは、附添われて寺へ参り、住職（法岸師）から、胎児の為に、日課の十念を授ける。妊婦はすでに、自らの日課の念仏の外、住職から授与された日課の念仏を、出産、誕生後凡そ三ヶ年、胎児、新生児の為に、母親が代って称名する。

人間受生の縁を、最上の縁と生かす為、仏縁を結ばせて、出産までの妊婦の精神生活が、胎児に良かれと同時に、正しい母性愛の発露となる様自ら律し、家族からも支えられるのである。

妊産婦の精神生活は、特に繊細且微妙なるもので、常時既に之を喝破して、健康診査や保健指導にも十分効果を發揮したものと云える。安全な分娩と、健康な子どもの出生には最も大切な過し方であろう。

健康な体で生まれるとき、同時に、健康な心も持つて生まれたいと願うは、人間の当然の思いである。受胎中に、母体から、物心共に受けつがれる事は、今更論をまた

ない。

今日、母子保健法の成立と施策を見ておることは、妊娠中に既に、胎児に一つ的人格を認められておることである。

仏教児童福祉が、法岸師により、着目され最高の価値観を認識させたる功績は、高く評価されるべく、讃辞を送らるべきである。

### 第七章 こども念仏（念仏学校）の性格

三師伝統のこども念仏会に随喜致し、主催すること久しく、殊に筆者得度以来五十余年中、戦前、戦後を通じ、子供たちと歩みを共にして来て、こども達とのふれ合いの中で、種々の要素、性格を感じた。思いつくまに、記述して見ることにした。

#### (1) 平凡性

祖師法然上人は、浄土の教を、凡夫往生と明かした。還愚に徹するとき誰でも救われる平易性が、こども達に受入れられ、功を奏したと思う。而も如来と凡夫、我とを結ぶ一体性を内蔵しておる事が、こども達

にとり、安定感を与えて来たと考えられる。

## (2) 親近性(信頼感)

法岸、良寛二師に、代表される容貌、態度は、先づ子供ずきと云う事だ。思い内にあれば、色外に現わるといわれる。自然に柔軟の徳を身につけると、子供達は、先づ信頼感を寄せる。之が子供会を成功させる要素である。こどもの集いに絶対の要件として、信頼される大人、教師、僧、リーダーであること、これなくしては成立しない。

## (3) 魅力性

こども達は、幻想、冒険、跳躍などの基本的性格を持っている。之等を叶え、満たすような設定をする事も必要であらう。大衆の中に溶けこみながら、常に一步、二歩の前進や時に後進をなし、不離不即を感じさせることも、子供達に新しい魅力を与えることであらう。時に変化、急転し、興味を持たせることになる。総じて、魅力あふれる教化の実践も大切な事である。

## (4) 永続性

三師八十年の教化は、十二分にその伝統をつくりあげて、今日に至っている。親先祖の血の中に滲みこんでいる。人の心は変わり易く、移り易し。祖師法然上人は、評して猿猴の枝を伝うが如しと。こども達に、永続性を感じさせ、あきらめぬ様に、つとめねばならない。これには、寺や僧は絶対有利な条件を具えておる。

## (5) 開放性(明朗感)

本来こども達は、自己中心性を持っており、又極めて開放的である。之が環境設定にも大変必要である。遠慮や会釈などおそ子供たちには苦手である。この苦手意識が、子供たちに、変な萎縮をさせてしまうこの意識をほぐすには、時間を要する。明朗な雰囲気づくりは、又会を成功に導く要素である。そこ抜けの明るさと開放さは、会を賑わせる。

## (6) 快活性

人間の幸せの要件は、微笑、笑いのある世界を云う。こどもの一挙手、一投足は、

笑い、喜び、ほほ笑みを引出してくれる。笑いの中へは、子供たちは、無条件に没入してゆく。笑いの中に、感激してゆく。笑いの中に、喜びをかみしめてゆく。仕草の中に、語りの中に、笑いを誘うとき、一段と感動するもの子供たちである。ほほえみ笑いは、喜びの尺度であり、幸せの目盛ともなるものである。

## (7) 神秘性

極楽や天国の存在、架空のおとぎの世界も又子供たちの夢に答える超越世界で、仏や神の姿を思索し、思慕するのも特長といえよう。自らの小なるを思わず、超人に期待し、超人の出現を信じて行くのである。この様な、神秘の世界、極楽の世界は、子供たちにとりては、極めて存在価値が高いのである。物語りが、幻想的になり、神秘的になると、その瞳は輝きを増す。そして限りなき夢を追って行く。

## (8) 反復性

繰返しは、進歩性を与えるものである。子供たちは、無条件に、この反復性を歓迎

する。常に、環境の中に自分を見出し、喜怒哀楽の条件に、一喜一憂する。その反復性の中に、益々存在性を確めてゆく。反復は、成長の原動力なる為、その思考が潜在意識の中に、確定されて行くのであろう。

### (9) 利益性

法然上人は、立教開宗の原動力となった大原談義のとき「万善の妙体は、名号の六字に即し、恒沙の功德は口称の一行に具わる」と、称名念仏の功德を掲げている。凡そ、人類と生まれて欲の無いものはいない。或は、生涯は、この欲を制し、昇華するのが一生かもしれない。

欲は、色々に形をかえて、前途に横っている。意識と思考の中に、欲の目のひらくとき、子供たちは、利益性を追うのである。童話「花咲爺」、「猿蟹合戦」、「桃太郎」など代表的童話の世界の中にも、欲をセーブする利益、功德性が説かれている。発展的に「本信本願、兼信因果」の大益を得せしめるべく、教化の柱を立てたいものである。

### (10) 慈母性

こどもは、家庭に母がいるというだけで終日、家を留守にして、安心して遊びまわられる。母は、天地の間に於ける最高の存在であり、慈悲の権化である。綱経にも「仏心とは、大慈悲なり」説いてある。母によりこの世に生れ、母により、生きる縁を与えられる。母あるは、最大の幸せなりとも、説いてある。

母家、母国、母胎、母堂など、思うだけで心おどりと、感動をよぶ。母あることにより、心の安らぎを得、安定感を持つことができる。況んや慈母あることは、此上なき安心感を得られるのである。

仏こそ、天地一切創造の慈母なり。南無と呼ぶ声こそ、仏と我を結び、母と我をむすぶ。ここに安らぎを、感じるのである。

### 第八章 児童福祉の展望

我が国の社会福祉政策は、いくつかの社会変動に際会しながらも、時々の福祉の課題に対応して、物心両面のバランスの取れた先進国並みの充実した社会福祉の向上を果たした事は、慶賀すべき事と思われる。

併し乍ら、国際状況や、政治の変動によ

り揺さぶられ易いのも、福祉ではあるまいか。

ともすれば、その底辺は、極めて狭く、不安定性を内在しておる様に感ぜられる。高度成長から、オイルショック以来低成長が、クローズアップされ、ちらほらと福祉後退の声すら、聞かれる。世界的不況の波は、我が国にも、おし寄せ、新しい対応策まで考えられる様な状況と思われるふしもある。

折角充実した福祉を、息の長い、継続性を持つ福祉へと進め巾広いゆとりのある環境の下に維持される様に願いたい。見直おそう福祉は、充分な物に、やさしい心を添え、対象者に、肩身の狭い思いをさせずには、ならないと思う。

特に本年は、国際児童年として、こども達に焦点を合わせ、児童福祉の新らしい出発点と考えて、福祉の充実を期待したい。打上げ花火か、線香花火の様に、思いっきのみの、福祉に終らぬ様、努力し、調和のとれた方向づけが望ましい。

原点は、人間愛の徹底と、生命の尊重が、両輪とならねばならない。

法岸上人により創められ、法洲、法道二師により、受継がれたことも念仏が、二百余年の歴史の中に、児童福祉として歩調を合せ、位置づけられたのである。

仏教の特性を生かし、大慈悲即仏心の立

## 仏教と児童福祉について

江 上 秀 雄

(高田短期大学教授)

場にて、人種をこえ、国境を越えて、救済の手を広げたい。難民の人々にも、飢えに泣く人々にも、平等施一切、同発菩提心と発展して行く事を、祈念する。

テーマが仏教と児童福祉でなくて、「について」となっているので、その問題に関する全般的なことではなくて、思いつきの二三の問題について述べておく。

一、児童という概念には出生以前も含まれる

昭和二十二年に公布された児童福祉法によると、この法律で、児童とは、満十八歳に満たない者をいい、児童を左のように分けている。

一 乳児 満一歳に満たない者

二 幼児 満一歳から、小学校就学の始期に達するまでの者

三 少年 小学校就学の始期から、満十八歳に達するまでの者

これは児童は出生から始まるという考え方である。

然るに現代の発達生物学 (developmental biology) によると、今まで生れつき遺伝によって、もたらされると思っていたものの中にも、胎内性、つまり先天的ではあって

も、遺伝性ではなく、まさしく環境性のものが、かなり多いことが明らかになってきた。そういう場合を表現型模写 (phenocopy) という。例えば妊娠初期の一ヶ月をビタミンAだけ完全に不足し、他の栄養は十分に与えて飼育された豚の子は、視神経を中心とした障害や脳異常があらわれたり、鉄やカルシウムが不足すると無脳児が生れることがわかった如きである。

このことは、児童は出生以前に、すでに或程度の制約をうけているという事を物語っている。それで児童という出生以前から考えなければならぬということになる。近頃0才児という言葉がよく用いられるが、これは出生以前の児童でなくて、出生後の乳児をさすようであって通常の一才児のことをさすのであるが、出生前の児童をさすようにも思われるので、まぎらわしいから用いない方がよいと思う。

さて仏教では児童の胎内にいる時期を次の如くに分けている。

一 凝滑 (ぎょうかつ) 滑らかなか

たまりということでは胎内に宿った最初の七日間